

1) 緒論 2) 口腔 3) 歯の解剖 4) 歯の発生 5) 乳歯の萌出 6) 出齦困難 7) 乳歯の手入法 8) 6歳臼歯 9) 乳歯脱落と永久歯の萌出 10) 歯の栄養 11) 食物と歯の関係 12) 歯と神経の関係 13) 体質的特長、及び変異と欠損 14) 歯列異常 15) 歯石 16) 齲蝕 17) 歯痛—抜歯—出血 18) 歯の衛生 19) 保存療法 20) 代用品—義歯

桐村の『歯乃養生法』は量的には原著の10分の1以下で、概要の抄訳程度のものである。また後半人造歯の部分は原著と大分趣を異にしているので、あるいは White の他の論文の訳かも知れない。

口絵やカット、そして章の配列などは、印象としては高山著保歯新論や衛生保歯問答に強い影響を見出すことができる。

以上を具体的に提示して詳説した。

36) 明治28年歯科医会編「歯牙保護論」の書誌学

Studies on the Bibliography of "The Protection of Teeth" published by the Dentists' Association in 1895

東京歯科大学 ○松本 実
田辺 明
栗山 美子
森山 徳長
石川 達也

Minoru Matsumoto, Akira Tanabe, Yoshiko Kuriyama, Norinaga Moriyama & Tatsuya Ishikawa, Tokyo Dental College

明治12年桐村克己が初めて翻訳の歯科衛生の啓蒙書を出版して以来、伊沢道盛、またとくに高山紀斎ほかに依り、大衆向きの平易な衛生指導書が次々と出版された。

わが国最初の歯科医師の団体として明治26年に結成された『歯科医会』は、その後発展して現在の日本歯科医師会の母体となった。明治28年同会は、会員が患者にチェアサイドで歯科衛生を説く

手引書として本書を編纂した。この46頁（うち本文31頁）の小冊子は、歯科医会の規約や役員・会員名簿を含んでいる。

（歯牙保護論の書誌学）

1) 書誌的概略：菊版紙表紙洋装幀の本書は、縦書旧漢字平仮名交り文で書かれ、12行30字詰、術語や難解語には右側に読み左側に意味のルビを振ってある。

構成は、表紙兼扉—1, 緒言—2, 図—2, 本文—27, 歯科医会紹介記事—3, 規則—6, 名簿—7, 奥付—1となっており、紹介記事以下は漢字片仮名交り文となっている。

2) 緒言：『歯堅則壽・何ヲ以テ之ヲ謂フ歯牙ニシテ朽傷歟損センカ食物ノ咬断齧碎何ニ依テ之ヲ営マン唾液ノ効、腸胃ノ力施コスニ由ナカラン…』という難解な書出しで、『歯が丈夫ならば永生きできるとはどういうことか？ 歯がむし食ったり欠けていたらどうしてよく咬めようか。唾液や胃腸の働きも役に立たず、滋養の多い食物も不消化となり、長生きはできない。さらに談話器、装飾器として大切で、デモステネスやクレオンの能弁や莊姜の美しさも、健全な歯牙により、長く詩に謳はれるのである。このように人生の快樂や榮譽はすべて健全な歯牙によるといっても嘘ではない。保護をおろそかにしても良いものであろうか。編者識』と述べる。

3) 口絵：第1図 上顎歯牙並植ノ状態、第2図 右側乳歯上下各歯ノ形状とが第1頁にあり、その解説は本文1頁にある。第3図 上顎切歯縦断面、第4図 上顎大臼歯縦断面（下顎の誤植）が第2頁で、解説は2頁にある。

4) 本文：目次はないが以下の見出しが文中に大活字で記載される。（ ）内は頁。

- 1 歯牙の解剖及発生期（1）
- 2 歯牙掃除及飲食物の注意（4）
- 3 歯磨粉（7）
- 4 歯石及血石（9）
- 5 歯牙交換期及乳歯保護（11）
- 6 齲蝕及消耗症（16）
- 7 充填（21）
- 8 義歯（23）

9 そめば 涅槃 (25)

以上の順序内容は、大凡伊沢とその後シリーズで発表された高山の著述に準じている。本書執筆者はある事情で明示されていないが、当時高山歯科医学院で歯科病理学等を講じていた青山松次郎である。第6項の記載などは、項目を立てて歯科病理学的に解説してある。

5) 本文その2 歯科医会に関する記載

9項目の次に『本編ヲ終ルニ臨ミ特ニ読者ノ注意ヲ乞ハントスルモノハ歯科医ト入歯齒抜営業者トノ区別是ナリ……』という書出しで、『内外科医ト同ジク官府ノ試験ニ及第シタル学術的医師』である歯科医と、『従来ノ入歯齒抜師ガ官庁鑑札ノ下ニ一時其業ヲ継続セル技術的職工ニ過ザル……歯科医ト類似ノ標牌ヲ掲出シ又自ラ齒医師ト唱フル者アリ』と区別を述べ、そのため世人が判別し難いので、歯科医会々員は図に示す門標を掲げると記載する。歯科医会規則と名簿については、成書、とくに東京都歯科医師会70年史に詳しい。

6) 奥付

著作兼発行者歯科医会、右代表者下川確矣、印刷者仁科衛、印刷所厚信舎とある。

(おわりに)

歯科医会は明治26年6月16日、大日本私立衛生会で発会式を行った。その後順調に発展し、28年春季常議員会で本書発行の事が決議され、幹事青山に執筆が依頼された。9月脱稿、印刷に付する際に幹事富安晋との間に確執が生じ、最終的には会と書記下川の名で出版された。

明治20年代半ばには、他にも啓蒙書が数種出版された。歯科医師数が漸増するこの時期に、歯科医団体の公式見解として、本書は大衆に対する啓蒙的口腔衛生論を展開したものと位置づけられる。

37) 方輿輓と歯科について

Studies on the Hōyogei and Dentistry

日本歯科大学 西巻 明彦
屋代 正幸

Akihiko Nishimaki, Masayuki Yashiro, Nippon Dental University

演者らは、第18回日本歯科医史学会で、「腹證と歯痛について」の中で、方輿輓の中に記載されている腹證について取り上げた。方輿輓の牙齒門は、他にも現代歯科医療に十分使用する事ができる項目が多数述べられている。今回校成方輿輓の牙齒門と、稿本方輿輓の牙齒門の記述の差について、考察を加えてみた。

牙齒門の最初の部分には、歯痛の原因が述べられ、胃熱、酒及び肉の多食、邪氣客熱、氣齒などが挙げられ、稿本方輿輓に比べ校成方輿輓は、歯痛の原因が簡潔にまとめられている。

稿本方輿輓、校成方輿輓とも、歯痛の原因の後に薬方、鍼灸、民間療法が記述されている。牙齒門における湯液は傷寒論、金匱要略の薬方が多く、ついで和剂局方、万病回春がこれについている。校成方輿輓には、三黄瀉心湯、調胃承気湯、小建中湯は取り挙げておらず、清胃散、犀角地黄湯、清陽散火湯などが変わり記されている。このため、校成方輿輓では万病回春の薬方が増えている。大塚敬節氏は『稿本方輿輓と校成方輿輓を比較すると「稿本」には「校成」にない腹証、口訣、類証鑑別などが詳しく述べられている。』と記しているが、牙齒門でもその傾向はまったく同じである。

また、校成方輿輓は処方他に挿話がつけ加えられ、牙齒門では六味丸の項目に、「洛下一リノ女醫有リ、牙疳ヲ治スルニ名アリ、嘗テ其方ヲ求メント欲スレドモ秘シテ傳ヘズ。余ガ友佐野元達故有ツテ其方ヲ得テ之ヲ余ニ傳エル。ソノ方即六味丸是レナリ。日後回春ヲ閲スルニ六味丸口臭牙齦赤爛ヲ治ス。」と記載され、京に六味丸を使って歯周疾患を治す有名な女医がいた可能性を示唆している。